

ダンボール コンポスト

ダンボールを利用し生ごみを堆肥にするコンポストを紹介します。簡単に作ることが出来ますのでぜひトライしてみてください。

用意するもの：ダンボール箱	40x35x30 cm 程度
腐葉土	2.5kg
米ぬか	1.0kg
もみ殻くん炭	0.5kg (ホームセンターや園芸店で売っています)
その他	ガムテープ、新聞紙、スコップ



大きさ 40x35x30cm 程度の丈夫なダンボール箱を用意します。底はガムテープで補強する。



水がしみ出したり、底が抜けるのを防ぐため、底に2日分の新聞紙を置く。底にダンボールをもう一枚置くのがベスト。



腐葉土、米ぬか、もみ殻くん炭を入れよくかき混ぜる。



生ごみはなるべく細かく切って入れる。一日 500g 程度は処理できます。



雨が当たらない場所に置く。箱と床の間に土台を置いて風通しをよくする。

注意)

ダンボール箱の表面から水分が蒸発するのでビニールシート等をかぶせないこと。

<生ごみ>

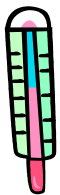


生ごみは小さくするほど発酵分解が早いので、形を小さくするとよい。

分解されにくいもの

- ・鶏がらなどの骨類
 - ・とうもろこしの芯
 - ・たまねぎの皮
 - ・卵の殻
 - ・防腐剤が使用されているかんきつ類の皮
 - ・塩分を多く含むもの(塩鮭、漬物など)
 - ・シジミやアサリの貝殻
- 魚の内臓、イカの内臓などを大量に投入すると悪臭が出る。

<温 度>



生ごみを入れたらよく攪拌します。自然界の好気性微生物が増え、分解が始まります。条件がよければ発酵が進み温度が 30 を超えるようになります。40 以上になると本格的に発酵が進みます。生ごみの量、種類にもよりますが 60 を超えることもあります。

底から返し、しっかりと混ぜる。側面の底の部分は特に空気が行き渡りづらい所なので、底から十分に返し切るように混ぜる。混ぜることで空気、水分、温度が均一に整えられる。

発酵が進むためには適度な温度が必要です。もし温度が上がらないようであれば、米ぬかを少量加えてよく攪拌してください。また使用済み天ぷら油も温度を上げるよい材料です。但し、油は多少ベタついたり、油の臭いが残る。

<臭 い>



特に強い臭いはない。気になった時はもみ殻くん炭、木灰の粉、コーヒーのかす等をふりかけるとよい。

臭いが出ないようにするためにも、毎日よくかき混ぜる。

<虫 カビ>



初夏の頃になるとハエがダンボールの周りを飛ぶこともあります。常に蓋をしっかりと閉め、ハエ等が入らないようにします。新聞紙を蓋に挟んだり、ダンボールで蓋を作ったり、細かい目のアミをかぶせたりするのも効果があります。

小バエ、ダニ等が発生する場合がありますが、温度を 40 以上に上げるとほとんどいなくなるようです。乾きすぎの状態が長く続くとダニが出やすくなります。状況に応じて水、米のとぎ汁等を加える。

<水 分>



分解が始まり温度が上がるとパサパサした状態になりやすくなります。乾燥の状態が続くと分解が進まなくなるので、水とか米のとぎ汁を入れ内部をしっとりした状態にします。

<出かける時>



留守にするなどで何日かかき混ぜることが出来ない時、表面に白いカビが発生することがあります。このような時よくかき混ぜ、いつものように生ごみを入れると元の状態に戻ります。

出かける前にしっかりとかき混ぜ、帰宅後、乾燥していれば水分を補給し、しっかりとかき混ぜる。

<投入の限界>

ダンボールコンポストでは3ヶ月から6ヶ月くらい生ごみを処理できます。生ごみがダンボールいっぱいになったり、攪拌してもさらさらでない状態になったら投入の限界です。

投入の限界になったら、同量の土を加えよく攪拌します。さらに、熟成させるため最低一ヶ月はそのまま寝かせます。長く熟成させるとより良質の堆肥になります。

堆肥として使用する時は、さらに土を混ぜて使用します。

<堆肥作りを続ける場合>

新しい基材料に出来上がった堆肥を混ぜると早く分解が始まります。